

関西大学 博物館実習展



2026年 11月8日(日) ↓ 11月26日(木)

入館料／無料

〔場所〕 関西大学博物館 特別展示室(千里山キャンパス 簡文館内)

〔開館時間〕 10時~16時(入館15時30分まで)

〔休館日〕 11月22日(日)

Kansai University Museum



大阪善哉 —オダサクの 生きた大阪—

大阪を代表する文豪、織田作之助をご存じでしょうか。代表作としては「夫婦善哉」が知られており、「織田作(オダサク)」という名称で親しまれています。彼は、太宰治、坂口安吾、石川淳と並んで無頼派と呼ばれる既存文学全般への批判を持ち、反俗、反権威、反道徳的言動で時代を象徴した作家のひとりです。彼の文学は、出身地である大阪の庶民の生活をテーマにしたものが多く、そこには彼の大阪への並々ならぬ思いが現れています。

本展示では、彼の来歴や作品だけでなく、彼がその作品の中で描いた「大阪」の姿を紹介します。この展示を通して、織田作之助の生きた大阪を感じていただけたら幸いです。



耳鳥斎 大坂のゆるかわ作家

江戸中期、安永から天明期にかけて上方で絶大な人気を誇った戯作家、耳鳥斎(俗称・松屋平三郎)。酒造家から骨董商へ転身した経歴をもつ彼は、「浪花の一癖の人物」と称された異色の存在です。儚作(がくさく)が出回るほどの熱狂を生み、大正時代にも再評価されました。

本展では、代表作『別世界巻』や『顔見せ之図』を通してその魅力に迫ります。確かな観察眼に基づく「品の良さ」と、クスッと笑える「ユーモア」が絶妙に混ざり合った画風は、現代の私たちの目にも「ゆるかわ」として新鮮に映るはずです。

光と闇が交錯する「荒唐無稽」な世界観と、卒にはまらない独創性。時代を超えて愛され続ける、唯一無二の魅力を堪能ください。



青 —愛好の系譜— BLUE Genealogy of the Appreciation

本展では、日本人がいかに「青」に魅了されてきたかを紹介します。「青」は古くから愛好され、自然の風景を表すだけでなく、人物や物語を表現するうえでも用いられてきました。本展で展示する浮世絵にも、「青」が登場人物の特定に結びついている作例が見られます。こうした色彩のあり方は、現代の「推し活」におけるイメージカラーにも通じるものがあるのではないのでしょうか。

展示では、まず比喩表現としての「青」に触れたあと、江戸・天保期の流行色「ペロ藍」をふんだんに用いた長谷川貞信の浮世絵を紹介します。さらに、九谷焼の色調を再解釈した人間国宝・徳田八十吉の作品などを通じ、「青」がどのように捉えられ、愛好されてきたのかを辿ります。



菅榎彦 表現の軌跡 大阪を見つめた一人の画人

近代大阪において人気を博した文化人・菅榎彦は、歴史や国学への学びを基に独自の画風を確立し、大阪の人々の暮らしや風俗を描いた作品を数多く残しました。また、絵画にとどまらず、墨蹟や装丁など幅広い分野で創作活動を展開したことも、その画業の特徴です。

本展では、代表作「きつねよめいりの巻」をはじめとする関西大学図書館所蔵の資料から、菅榎彦の多彩な創作活動を振り返ります。画風の確立に至る学び、大阪の歴史風俗を描く「浪速御民」を掲げての活動、そして墨蹟や装丁へと広がる表現に注目し、作品に込められた関心や創作の軌跡を紹介します。菅榎彦の画業を通して、近代大阪の文化や暮らしにも目を向ける機会となれば幸いです。



関西大学博物館 関西大学千里山キャンパス 簡文館内

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 TEL : 06-6368-1171

<https://www.kansai-u.ac.jp/Museum/> E-mail : hakubutsukan@ml.kandai.jp

[アクセス] 関西大学千里山キャンパス 阪急千里線「関大前」駅 徒歩10分